

## リズムを翻訳する フランスにおけるフンボルト受容の一例としてのメショニックの翻訳論

藤田省一

*This paper is a brief account of one of the impacts the German linguist-translator Wilhelm von Humboldt (1767-1835) has had upon French language philosophy. Henri Meschonnic (1924-2009) elaborates his theory by developing Humboldtian conceptions. As his precursor, he sees the activity of language best incarnated in the rhythm, and emphasizes the rhythmic structure of biblical verses in his translation of the Old Testament; so that it often goes out of accord with the syntax. Translation here is expected to enable to hear what the text says, rather than comprehend what it means. These two translators, however, agree no longer in respect of what language to translate (into): Meschonnic insists every Occidental (i.e., Christian) language render the Hebraic Bible, while Humboldt barely take anything into consideration but his own and Classical Greek. The question will be to investigate the historical relationship of languages through the general application of this rhythmic translation.*

### 1. はじめに

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト(1767-1835)はフランスでは長らく少数の専門家にのみ知られる存在だった(Chervel, 1979)。しかし、主著のいわゆる『カヴィ語研究序説』の翻訳刊行(1974)を契機として状況は改善されつつあり、2001年にはユルゲン・トラバントらドイツの研究者を招いてシンポジウム<sup>1</sup>が開催されるなどしている。受容が進む中、とりわけ目を惹くのは、ヘブライ語聖書の翻訳で知られる詩人・批評家アンリ・メショニック(1924-2009)のかかわり方である。パリ生まれのユダヤ系フランス人メショニックは、1968年の「五月革命」を承け設立されたヴァンセンヌ実験大学に創設スタッフ(詩学・言語理論担当)として参加するのだが、それ以前に赴任していたリール大学の同僚らからの影響もありフンボルトに親しむようになったらしい。言語に対する彼の関心がフランス近代詩(とりわけマラルメ)を出発点としているのは間違いないところだが、主体的また歴史的な言語活動としての「ディスクール」を重視する彼の立場は、アルジェリア戦争従軍をきっかけとして始められた詩作やヘブライ語習得と強く結びついている。そのヘブライ語聖書翻訳には、他者を抑圧してきた自己とその他者の関係に対する実践的批判という側面がある。

---

FUJITA Shoichi, "Translating Rhythm," *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 37-48. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

同時にメショニックは、フンボルトからの影響を隠していない。そのフンボルト理解は常識を大きく超えるものではないけれども、翻訳という実践を通じ、フンボルトの著作によって提起される問題がいつそう明瞭に把握されうると思われる。本稿は、彼の翻訳理論の集大成である『翻訳行為の詩学』(1999)とフンボルトの言語哲学の関係を概観しつつ、両者の異同について考えようとするものである。

## 2. シーニュからディスクールへ

### 2.1 エルゴンとエネルゲイア

まず、フンボルトによる「エルゴン」と「エネルゲイア」の区別を確認しておこう。

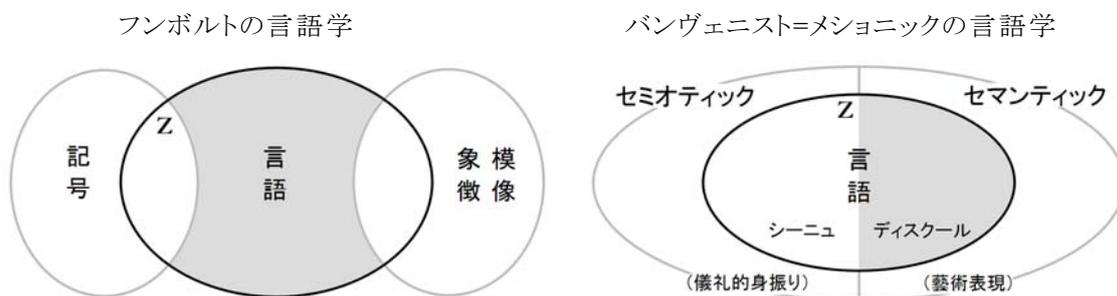
言語というものは、その実際の本性に即して把握してみれば、持続し、かつあらゆる瞬間ごとに移ろいゆくものであることがわかる。[...]。言語そのものは、出来上がってしまった作品(エルゴン)ではなく、ひとつの活動(エネルゲイア)である。[...]。このような[生成に即した]定義は、そのまま厳密に受け取るなら、その都度なされる発話のそれである。[...]。まさしく最も高度にして最も精妙なものは、そのようにばらばらになった要素[語や文法規則]において認識されることはなく、(それだけにいつそうこのことは、真の言語がその実際の産出活動にこそ存するという証明になるけれども)諸要素が結合されたまとまりとしてのディスクール[Rede]のうちのみ知覚ないし予感することができる。[...]。言語を打ち砕いて単語や文法規則に還元してみても、そこに残るのは学問的解剖によって生命の失われてしまった作りものでしかない(Humboldt, 1968e; フンボルト 1984: 73-74)。

メショニックはこの区別を、言語学におけるシーニュ(signe, Zeichen)とディスクール(discours)の区別に重ね合わせ、自身の言語理論の礎としている(Meschonnic, 1999: 178)。ディスクールとはこの場合、フランスの言語学者エミール・バンヴェニスト(1902-1976)の提唱した「ディスクールの言語学」に出自をもつが、このことは個人的影響関係を超えて、記号論・構造主義の批判という、より大きな文脈に位置づけることができる。ディスクールの学、すなわちセマンティック<sup>2</sup>は、フェルディナン・ド・ソシュール以来の「シーニュの言語学」(セミオティック)の限界を補うべく構想されたものだからである(Benveniste, 1974a)。セミオティック、セマンティックともに「意味」を表すギリシャ語 *σήμα* (sema)から作られた名称だが、両者のアプローチは大きく異なっている。メショニックの置かれていた状況を理解するためにも、フンボルトにおける「記号」との比較を試みながら、シーニュがいかなるものであったか簡単に振り返っておきたい。

### 2.2 セミオティックとセマンティック

フンボルトは、記号的なもの一般のうちで、「記号」とは重なり合いつつも相異なるものとして「言語」を考えていた。「言語」において概念と音声が不可分であるのに対し、「記号」においては「指し示されたものがその記号から独立した存在を有す」(Humboldt, 1968b: 428;

トラバント 2001: 81-82)<sup>6</sup>。「記号」を構成する二項の関係は恣意的であって、その結果、「意味するもの」と「意味されるもの」が相互に際限なく送り返され合う、つまりある「記号」によって「意味されるもの」がそれ自身「記号」として別のものを指し示すという無限の連鎖が生じることとなる。このような性質はノヴァーリスや Fr・シュレーゲルらロマン主義者<sup>3</sup>、あるいはパースにおける記号が共通してそなえるものである。二十世紀の構造主義や記号論が依拠したのもまさにそうした記号だったが(極端な例としてジャック・ラカンの「浮遊するシニフィアン」)、これでは言語とそれ以外の記号体系とを区別することが意味をなさなくなる。ソシュールの功績は、「記号[意味するもの]と意味されるものとの差異」(Benveniste, 1974b: 65)、すなわち「聴覚イメージ」としての「意味するもの」と、「意味するもの」にはもはや成りかわることのない窮極の「意味されるもの」(「概念」)とを導入することで無限の反転をとりあえず終わらせ、一般的な記号とは区別さるべき閉じた体系としての「ラング」を考えた点にある。だが、閉鎖系というその前提ゆえに、「ラング」は言語活動の実相から遊離してしまうほかない。言語が他の記号体系から差異化されるとすればそれは、セミオティックとセマンティックという二重の意味産出作用を有するためであり(Benveniste, 1974b: 45)、フンボルトのいう「記号」的性質(下図の Z)を対象とするシーニュの言語学だけでは、その働きを考究するには明らかに不十分なのである。フランスにおけるフンボルトの「発見」、そしてメジョニックによる注目は、こうした時代背景とおそらく無縁ではない。



シーニュとは異なり、ディスクールは、言語外の状況や参照項とのかかわりをつねに保つ。セマンティックとはしたがって、ひとつの特殊な出来事として発せられ、その都度消えてゆく発話の意味産出プロセスの解明を目指す言語学ということになる。

セマンティックという考え方によってわれわれは、実際に用いられ働いている言語の領域へと導かれる。われわれが言語のうちに見て取るのは、人と人とを、人と世界を、精神と物体とを媒介する働きであり、言語はそこにおいて情報を受け渡し、経験を伝え、同意を強要し、応答を促し、[...]つまりは人間の生の全体を組織するのである。[...]。言語の[ふたつの]機能のうち、ただセマンティックだけが、社会の統合、世界への適応、また結果として思考の調整、意識の発展を可能とする(Benveniste, 1974a: 224)。

かくして、バンヴェニストのいうディスクールと、フンボルトの考えた「エネルギーとしての言

語」とがきわめて近いことは容易に諒解される。フンボルトの言語思想が、J・トラバントのいうところに従うなら、同時代の言語学からずれてしまったことにより記号論批判としての意義を帯びることになったのとはやや異なり、バンヴェニストはむしろ言語学の内部で同種の批判を意識的に行なったということになるだろう。メショニックは『翻訳行為の詩学』で両者に言及しながらこう述べている。

ディスカールというものが、フンボルトのいうように「今まさに話している」[...]人間の活動を指すならば、そしてそれが、バンヴェニストによって初めて認識され分析されたように、私と発話する者が、自身のディスカールのうちに文法的に刻印されることを含意するなら、この発話行為が単に理論上のものあるいは観念的なものにとどまることはありえない(Meschonnic, 1999 : 12)<sup>4</sup>。

生きた言語をばらばらに解体してしまうことのない言語の学知としてフンボルトの思い描いたもの、メショニックはバンヴェニストの言語学にも抛りながらそれを再生すべく試みたと、ひとまずいうことができるだろう。

### 3. 何を翻訳するか — セマンティックと翻訳

言語活動のひとつの様態として翻訳は、シーニュの体系としての「ラング」ではなく(「ラング」には外部が存在しないのだから)、必然的にセマンティックの水準で営まれる。セマンティックと翻訳は実際にそれではどのような仕方で交差するのだろうか。経験に尋ねてみるなら、翻訳の過程でわれわれは(シーニュとしての)語という困難な存在にしばしば直面させられる。困難とはしかし、技術的水準の問題ばかりをいうのではなく、言葉とその意味内容の「自然」な紐帯に対する信頼が揺るがされるような事態をも指すと考えなくてはならない。逆説的だが、翻訳ないし言語の複数性を考慮するかぎり、「記号」的側面を言語から完全に排除するのは難しい。「チーズには Käse という自然な名前があるのにフランス人は何故それを fromage などというおかしな名で呼ぶのか」 — この問いをたんなる蒙昧の頭れとして退けることはできないのである。

#### 3.1 フンボルトにおけるリズム

語というものの個性性、「統一性」を唱え、さらに精神と言語の不即不離を主張するフンボルトの立論(Humboldt, 1968e: 120-121)は、いわゆる翻訳不可能性という、あるいは少なくとも「忠実」な翻訳の不可能性という帰結を予想させる。実際、語の水準で翻訳をとらえるこのような視点が、翻訳論において「意味か形式か」という対立のある種の原動力となってきたことは誰もが知る通りである。しかし言語の複数性はフンボルトにとって思考や言語活動の前提条件にすぎず(Humboldt, 1968c: 170)、その不可能性を予示するものではなかった。「古代、とりわけギリシャ古代の研究について」という 1793 年の論攷においてフンボルトは、「いわば読者の精神の調子を作家の精神のそれに合わせる」ような翻訳について論じ、散文を訳すにはその「言葉づかい」(Diktion)を、詩の場合には「リズムと韻律構成」を適合

させるべきだと述べているが(Humboldt, 1968d: 280; 三ッ木 1999: 576-578)、同様の主張が『アガメムノン』翻訳への序論においても展開されている。

リズム(Rhythmus)はギリシャの詩人、とりわけどのような韻文形式をも自らのものにした劇詩人のうちで働いていたのだが、いわばそれ自体として成り立つひとつの世界であって、思考とは別に、また旋律を伴う音楽の世界とも別に存在するものである。リズムは未分明のままにうねる(das dunkle Wogen)感情や心情を、そのうねりが波となって語を満たす前に、あるいはそれら語の響きが波にかき消されてしまうそのときに、描き出してみせる。あらゆる優美と崇高が身にまとう形姿、すなわちあらゆる性格の呈する多様性がこのうねりのうちにあって、思うがままの充溢において展開しながら、つねに新たな創造物をもたらすことになる。またそれはいかなる素材によっても鈍重とはなりえない純粋な形式であって、音のうちに自らを、つまり魂を最も深いところにとらえるものにおいて自己を顕わす。内奥に潜む感情の本質に最も近いものだからである(Humboldt, 1968a: 135)。

この一節は、「エネルギー」としての言語の本質をよくいい表していると思われる。人間が言葉のうちに聴くのは物理音ではなく、「リズム」である。そしてフンボルトが翻訳の営みを通してこのような「リズム」に着目したとすれば、翻訳においてこそ言語の本質が顕れるということがそこで示唆されているのかもしれない。いずれにせよ、翻訳の対象がこのような「リズム」であるとするなら、セミアティックからセマンティックへという転換は、言葉の意味を担うべき分析単位の量的な(語から文、文節へといった)変化ではなく、むしろ視点の移動と解されなくてはなるまい。事実、バンヴェニストは *sémantisme* すなわちセマンティックの水準で把握された「意味」だけが翻訳可能としている(Benveniste, 1974a: 228-229)。

### 3.2 メショニックの聖書翻訳とリズム

フンボルト同様に「リズム」の翻訳を唱えつつ、メショニックは翻訳が目指すものを次のように規定する。

[...]私はリズムを、ディスクールのうちで意味が組織され展開されるさまと理解する。すなわち、ディスクールの主体性および個別性の(韻律から抑揚までを含みうる)組織化であり、したがってその歴史性である。[...]。翻訳が目指すのはもはや語義(sens)などではなく、それ以上のもの、そしてそれを包摂するもの、すなわち意味産出のあり方(mode de signifier)なのである(Meschonnic, 1999: 99-100)。

「語義(sens)から意味作用のあり方へ、シーニュという非連続的なものから、単語単位で切り分けられたのではない[...]連続的なものへ」(Meschonnic, 1999: 28)という観点より実践されたヘブライ語聖書(申命記 11 章 30 節)のフランス語訳はたとえば次のような形をとる(Meschonnic, 1999: 107)。

Ne sont-elles pas    au delà du Jourdain        derrière    le che-  
min    où va le soleil        au pays du Cananéen        qui habite  
la Arava  
Face    au Gilgal        près    des chênes de Moré

この例における語と語の間隔それぞれが元の詩句のリズム(ヘブライ語特有のアクセントなどによって表現される)に対応するものとメショニックはいつている。それにしてもきわめて作為的な結構といわなければならない。これは「学問的解剖」のせいでばらばらに切り刻まれてしまった「エネルギー」の亡骸だろうか。だが原典とは、翻訳過程で必ず死(そして再生)を経験するものであり、そこにおいて賭けられているのは、テキストをいかに「エネルギー」として蘇らせるかということなのである。

リズムのまとまりが意味のまとまりであるとするならば、詩行における間隔の拡大によって、シンタクスの水準でのまとまりと意味の水準でのまとまりが衝突を起こすことになる。いわゆる「意味」はシンタクスとリズムの間で引き裂かれるわけだ。しかし優先されるのはリズムである。前置詞と特定の実詞を結びつけ、また名詞句の内部で各要素を結びつける統辞法<sup>シンタクス</sup>に抗って、リズムはそれらを引き離すのだから。ところで、リズムは語義に何の変化も及ぼしはしない。リズムが何かを変容させるとすれば、そして外からディスクールへと到来するものはそのディスクールに変化をもたらすのである以上、リズムは必ず何ものかを変容させるわけだが、それは意味産出の仕方以外ではありえない(Meschonnic, 1999: 104)。

メショニックのやり方が対象に依存しない普遍性をもつかどうか、その点についてここで確かなことはいえない。それでも、翻訳者の動員しうる言語資源が個人ならびに社会の水準において歴史的に定められている点を考慮するならば、彼の翻訳法は記号論批判という文脈で十分に理解可能なものである。

### 3.3 リズム翻訳の射程

だがさらに、長い歴史を誇る聖書翻訳の文脈に照らしても、彼の訳業には意義が認められる。リズムの語源となっているギリシャ語 *ρυθμός* の意味変遷(Benveniste, 1966)<sup>5</sup>を参照しつつメショニックは、ヘブライ語聖書のリズムが、ヨーロッパで伝統的に考えられてきた「強拍と弱拍[または長短拍]の形式的な交替」という韻律に収まりきらぬものである点を強調している(Meschonnic, 1999: 31)。ヘブライ語聖書には、ヨーロッパが耳を傾けてこなかった固有のリズムが備わっており、聖書のフランス語訳はしたがって、フランス語を通じて行われる、ヨーロッパ的リズムの歴史的批判たりうるだろう。新約聖書のマルコ福音書(15:34)やマタイ福音書(27:46)に音訳されたうえでギリシャ語に翻訳された旧約詩篇(22:1-2)の名高い一節 *ēlī ēlī lā'mā 'azavtāni*<sup>6</sup>(ラテン文字転写、「'」はアクセントを示す)を例にとろう。

伝統的な翻訳例とメショニックの翻訳 (Meschonnic, 1999: 134) を示す。

|           |  |
|-----------|--|
| ギリシャ語訳    | θεέ μου θεέ μου, <u>ίνατί</u> με έγκατέλιπες               |
| ラテン語訳     | Deus Deus meus <u>quare</u> dereliquisti me                |
| ルター訳      | Mein Gott, mein Gott, <u>warum</u> hast du mich verlassen? |
| 英語訳 (欽定版) | My God, my God, <u>why</u> hast thou forsaken mee?         |
| 英語訳       | My God, my God, <u>why</u> have you forsaken me?           |
| フランス語訳    | mon Dieu, mon Dieu, <u>pourquoi</u> m'as-tu abandonné ?    |
| メショニック訳   | Mon Dieu mon Dieu <u>à quoi</u> m'as-tu abandonné ?        |

ここでメショニックはヘブライ語原典中の *lāmā* を問題とする。この二音節の語はアクセント (ヘブライ語で *munah* と呼ばれるもの) の位置によって働きを変えるからである。第一音節の場合は確かに「なぜ、どのような理由・原因からか」という意味を表すのだが、原文のアクセントは実際は第二音節に置かれており、*lāmā* は意図・目的を問う疑問詞「何を目指してか」(ドイツ語では *wozu*) と解されなくてはならない。

こうした翻訳批判の射程は、文意の解釈という狭義の文学的水準にとどまるものではない。問われているのはむしろテキストにより指向される時間であって、この一節に現れているのは、一方でユダヤ教的な、終わりなき捕囚・追放の表現、いま一方ではキリスト教的終末論という、歴史的なひとつの対立なのである。

詩篇 22 章を訳すとき、あらゆる翻訳 [...] が実際に聴いているのは『マタイ福音書』[のギリシャ語]なのだ。リズムはここでは、意味のパリンプセストとなっている。そしてただリズムだけがこの詩篇を[ヘブライ語で]聴いているのである (Meschonnic, 1999: 134-135)。

「パリンプセスト」はここでは、「リズム」が重ね合わされることによって初めて(元の)言葉が浮び上がってくるという、テキストの運動を表現したものと理解する必要がある。そしてその運動—フンボルトならエネルゲイアと呼ぶだろう—は、リズムが語って聴かせる通り、いわば無限に未来へと開かれた時間を指向している。他方、終末論に含意されるのは、終わりから顧みられた目的論的な過去、またしたがって予型論的な「旧」約聖書解釈である<sup>7</sup>。そこでは、ディスクールとしてのヘブライ語の特質は考慮の埒外へと追われてしまう。聖書固有のリズムの「非ヘブライ化」(Meschonnic, 1999: 427) に手を染めてきたフランス語が、翻訳においてそのリズムの復元に努めなければならないのは、まさにそのためなのである。

ディスクールのリズムは客観的に存在するのではない。長い聖書翻訳の歴史を、すなわちこれまでの翻訳の大半がヘブライ語固有のリズムを聴き損ねてきたという歴史を振り返ればそのことは明らかである。リズムとは、それを聴こうとする者において初めて姿を顕わすものであり、人がそこに聴きとるのはしたがって、音ではなく、主体、より正確には「主体化」のプロセスということになる<sup>8</sup>。このプロセスには、他なるもの、キリスト教にとってのユダヤ教、西欧の言語にとってのヘブライ語がリズムを通して関与している。リズム的なもの、エネルゲイ

アとしての言語、すなわち「意味か形式か」という二元論を超えてセマンティックの観点に立つことで把握できるようになるこのリズムこそ、翻訳を可能にし、また促すものである<sup>9</sup>。メシヨニックの翻訳理論＝実践はその意味において、フンボルトの言語理論をほとんど文字通りに受け止め、翻訳に適用しようとしたものということができる。

#### 4. 結び

リズムの翻訳はしかし果して一般化しうるのだろうか。というのは、同じ「リズム」といういい方をしながらも、フンボルトとメシヨニックの翻訳実践、それに際しての意識には、無視しえぬ違いが認められるからである。相違は、第一に両者の翻訳対象言語が異なっている点、第二として、18世紀末から19世紀にかけてのドイツ語と20世紀後半のフランス語それぞれの形成度合(についての歴史的意識)が同一でない点に由来すると考えられる。

メシヨニックの聖書翻訳における現代フランス語は、ある程度まで他のヨーロッパ言語と置き換えが可能だし、またヘブライ語を抑圧してきたという経緯からしてむしろそれは当為であるとさえいえるだろう。ヘブライ語聖書の翻訳は結果として、他者を抑圧しようとする西欧言語が自らに対して示す抵抗の様相を帯びることとなる。

他方、リズムと民族性の連関にひとつの必然性を見ていたフンボルトにとって、古代ギリシヤ詩のリズムこそが翻訳を通じて模倣さるべきものだった。「ギリシア人は、私たちが知るうちでこうしたリズムをおのれのものとしていた唯一の民族」(Humboldt, 1968a: 135-136)である、ということはすなわちドイツ語は、ただギリシヤ詩のこれこれの韻律を技術的に移入するばかりでなく、ギリシヤ人のリズムに対するかかわり方そのものをも学ばなくてはならないのであって、両言語の間にはつまり絶対的格差が存在しているということになる(三ツ木 1999)。そして、まだ十分な形成を経していないという歴史的特性ゆえに、ドイツ語には、古代ギリシヤ語のいわば特権的地位が(密やかに)反映される(Humboldt, 1968a: 136)。同時代のたとえばフランス語のように、独自に形成が進んだため模倣の必要をもちや感じることがない(あるいはその能力を失ってしまった)他の言語と置き換えることは実質的に不可能だからである。

またフンボルトの見地からは、ヘブライ語のリズムと現代フランス語の統辞の間におけるような「衝突」が、ギリシヤ語とドイツ語の間で生ずることはない。当時のドイツ語に求められたのは、抵抗ではなくあくまで模倣(としての翻訳)だったからである。もっとも、こうした問題は、異教的古代としてのギリシヤ詩(ならびにラテン詩)、「パレスチナのユダヤ人」によって書かれた新約聖書のギリシヤ語(田川 2008: 854)<sup>10</sup>、ローマ教会のラテン語、国民国家形成の礎となるべき「古典語」としてのギリシヤ語・ラテン語(曾田 2009)等々との複雑な関係のうちにドイツ語が位置づけられぬかぎり、精確に論ずることはできないだろう。

結論として、フンボルトの考えたようなリズムの翻訳は、現代の翻訳論に新たな地平を開く一方、メシヨニックの訳業によって提起されるその一般化可能性の問いを通じ、諸言語の関係の歴史性についてさらなる考究を促すものということができる。

.....

【著者紹介】

藤田省一 (FUJITA Shoichi) 専攻はフランス近代文学(プルーストを中心とした)、翻訳論。

.....

【注】

- 1 このシンポジウムでは、『カヴィ語研究序説』の訳者 P. Caussat(1974 年版)と D. Thouard (2000 年版)との間でたとえば *Verschiedenheit* のフランス語訳—*différence* (差異)か *diversité* (多様性)か—をめぐって議論が交わされた (Chabrolle-Cerretini, 2002)。
- 2 バンヴェニストの考えたようなセマンティックは、専門化・細分化の進んだ現在の言語学においては直接対応する領域がない。言語学という *semantics* すなわち「意味論」は、もはや *semiotics* と対立するのではなく、「語用論」(*pragmatics*)と並立しつつ、相互補完的關係を形成しているようである。この「語用論」が敢えていえばセマンティックに近い。ちなみにいうなら、バンヴェニストがディスクールと言語学を提唱した 1966 年に刊行されたミシェル・フーコーの『言葉と物』でもディスクールという概念が用いられている。フーコーや彼に依拠する言語論・権力論ではディスクール(ドイツ語では *Diskurs*)は、個々の発言 (*énoncés*) の総体としてとりわけ権力や制度の働きを反映するものとされる(「談話分析」など)。他方バンヴェニスト、そしてメジョニックのいうディスクール (*Rede*) は *énoncé* (発せられた言葉)ではなく *énonciation* (言葉を発する行為)を指すものであり、観点の違いからして、少なくとも本稿では、有意な関係を両者の間に認めないものとする。
- 3 言語の歴史性や社会性、複数性を捨象しなかったゲーテやフンボルト、シュライアーマハーらとロマン主義者の差異については、Berman, 1984 (ベルマン 2008): 34-36 参照。
- 4 また Meschonnic, 1999: 349-350 を参照。フンボルトの発言は Humboldt, 1968e: 42 より。フンボルトが考えていたようなギリシャ詩は実のところ、後世のわれわれが考えるところの「韻文」であると同時に「音楽」でもあるような表現形式だった。「ギリシャ人にとって音楽とは、なによりもまず韻文 (*Vers*) の中に存在するものだった。ギリシャ人の韻文とは、言語であると同時に音楽でもあるようなひとつの現実だったのである。そこで言語と音楽を結びつけていたもの、つまり両者に共通するものはリズムであった」(ゲオルギアードス、1994: 15)。また三ツ木(1999: 584-586)参照。
- 5 リズムという語の源であるギリシャ語 *ρυθμός* (*rythmos*) の本義「ものが流れるある特定のさま、流れ」が、デモクリトスや悲劇作家において「形態 *forme*」、そしてとりわけ「固定されることなくつねに動く配置 (*dispositions, configurations*)」へと転じ、ついでプラトンにおいて「(とりわけ身体的な)運動の形態」の意味が付け加わったことを論証したバンヴェニストの研究。
- 6 「マルコ福音書」15 章 34 節「我が神、我が神、何ゆえ我を見捨て給いき」(田川 2008: 49, 473-477)。
- 7 ヘブライ語聖書を旧約として、つまり新約を予示するものとして解釈する予型論は、ヘブライ語テキストの「意味」にのみ注目することで、ディスクールとしてのヘブライ語聖書の固有性を

失わせることにつながる。メショニックは予型論が解釈学的言語理解に通じているとして批判している。つまり、解釈学は「意味」を目指すことによってディスクールとしての言葉をシーニュへと還元し、最後にはシニフィアンとシニフィエに解体してしまうものであると (Meschonnic, 1999: 72)。メショニックやベルマンによる解釈学批判には批判対象の矮小化という問題もなくはないが、それでもやはり一考には値しよう。

8 「リズムをもち韻律をもつディスクールという連続的なものに身を投ずることを通じて、発話の主体の変容の運動が引き起こされる。そこにおいて主体は、途切れないものの主体化の運動へと変わるのである」 (Meschonnic, 1999: 12, 349-350)。

9 ヴァルター・ポルツィヒ (1975: 38-39) は「意味と形式」の対立に代わるべき「意味様式 (Bedeutungsweise)」を提唱したが (「インドゲルマン語のシンタクスの課題」、バンヴェニストはそこで言及された「意味論」に別の次元を付け加えたといえることができる)。

10 マルコは生粋のギリシャ人ではなく、パレスチナのユダヤ人だった。「この著者のギリシャ語はしばしばたどたどしい。文章が単調で、一方では無駄な重複表現が多いかと思うと、他方では単語を省略しすぎて意味が通じにくい。文法的な間違いもある、等々。[...]。／その、あまりギリシャ語っぽくなく、一見いかにも幼稚だが、独得のリズムのある楽しい文章を再現するために、我々は最大限できる限りの逐語訳を押し通した。通常の翻訳の常識としては無茶なくらいに。たとえばこの著者は大多数の文を「そして」(kai) ではじめる。ギリシャ語の kai は日本語の「そして」よりはだいぶ軽いにしても、大多数の文を「そして」ではじめるなどギリシャ語の文としては普通ありえないことである。小学生の下手な作文みたいな。ただしこれももちろん著者が稚拙なのではなく(そうには違いないが)、ヘブライ語アラム語の発想を持ち込んだだけである」(同 856-857)。

#### 【参考文献】

- Benveniste, É. (1966). « La notion de “rythme” dans son expression linguistique » (1951), *Problèmes de linguistique générale [PLG]*, Paris, Gallimard, 2 vol., t. I.
- Benveniste, É. (1974a). « La forme et le sens dans le langage » (1966, 1967), *PLG*, t. II.
- Benveniste, É. (1974b). « Sémiologie de la langue », article inaugural de la revue *Semiotica* (n° 1 et 2, 1969), repris dans *PLG*, t. II.
- Berman, A. (1984). *L'Épreuve de l'étranger*, Paris, Gallimard.
- Chabrolle-Cerretini, A. M. (Eds.). (2002). *Éditer et lire Humboldt* (supplément électronique à la revue *Histoire Épistémologie Langage*), Société d'Histoire et d'Épistémologie des Sciences du Langage. [Online] <http://htl.linguist.univ-paris-diderot.fr/num1/num1.htm> (June 10, 2011).
- Chervel, A. (1979). « Le débat sur l'arbitraire du signe au XIX<sup>e</sup> siècle », *Romantisme*, n° 23.
- Humboldt, W. v. (1968a). *Aeschlos Agamemnon metrisch übersetzt von Wilhelm von Humboldt* (1816), *Gesammelte Schriften [A]*, hrsg von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, B. Behrs, 17 Bde., 1906-1936 ; Berlin, Walter & Gruyter, Bd. VIII.

- Humboldt, W. v. (1968b). *Grundzüge des allgemeinen Sprachtypus* (1824-1826), A, Bd. V.
- Humboldt, W. v. (1968c). *Latium und Helas oder Betrachtungen über das klassische Altertum* (1806), A, Bd. III.
- Humboldt, W. v. (1968d). *Über das Studium des Altertums und des griechischen insbesondere* (1793), A, Bd. I.
- Humboldt, W. v. (1968e). *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Meschengeschlechts* (1830-1835), A, Bd. VII.
- Meschonnic, H. (1999). *Poétique du traduire*, Lagrasse, Verdier.
- ベルマン、A (2008)『他者という試練 ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一訳)みすず書房
- ゲオルギアーデス、T・G (1994)『音楽と言葉 ミサの作曲に示される西洋音楽のあゆみ』(木村敏訳)講談社学術文庫
- フンボルト、W・v (1984)『言語と精神 カヴィ語研究序説』(亀山健吉訳)法政大学出版局
- 三ッ木道夫 (1999)「翻訳と歴史意識(一) ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの翻訳論」『同志社大学言語文化学会 言語文化』1 巻 3 号
- 三ッ木道夫編訳 (2008)『思想としての翻訳 ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社
- ポルツィヒ、W (1975)「インドゲルマン語のシンタクスの課題」『現代ドイツ意味理論の源流』(福本喜之助、寺川央訳)大修館書店
- トラバント、J (2001)『フンボルトの言語思想』(村井則夫訳)平凡社
- 曾田長人 (2009)「ドイツ新人文主義の近代性と反近代性」『思想』7 月号
- 田川建三 (2008)『新約聖書 訳と註』第一巻 作品社

## Traduire le rythme. La conception du traduire chez Henri Meschonnic comme réception en France de Wilhelm von Humboldt

Shoichi FUJITA

L'objectif de cet article est de montrer brièvement l'un des impacts qu'a exercés le linguiste traducteur allemand Wilhelm von Humboldt (1767-1835) sur les pensées du langage en France. Henri Meschonnic (1924-2009) élabore sa théorie en reprenant les conceptions humboldiennes. Comme son précurseur, il voit l'activité de langage incarnée le mieux dans le rythme, et accentue dans sa traduction de l'Ancien Testament la structure rythmique des vers bibliques, quitte à la mettre en désaccord avec la syntaxe. C'est là pour permettre d'*écouter* ce que dit le texte, plutôt que de comprendre ce qu'il *veut dire*. Les deux traducteurs ne sont pourtant plus d'accord sur ceci : (en) quelle langue à traduire. Meschonnic demande que toute langue occidentale chrétienne rende la Bible hébraïque,

tandis que Humboldt n'envisage guère que la sienne et le grec classique. Il s'agira ainsi d'examiner les rapports historiques des langues à travers l'application générale de cette traduction rythmique.